４．沖ノ島出土の鏡に関する調査・研究の現状と課題

辻田 淳一郎　九州大学

要旨：本稿では、沖ノ島遺跡出土鏡群に関する調査・研究の現状を整理し、今後の国宝整理事業に向けた課題の検討を行った。沖ノ島遺跡出土鏡群については、1970年代の報告書刊行以降も、様々な形で検討が行われるとともに、2010年に刊行された三次元計測の成果を中心とした報告書により、資料の全体像が明らかとなってきている。また令和６年度に行われたInnovative Museum事業により、X線による透過撮影が実施されるなど、沖ノ島遺跡出土資料全体の中でも、検討が進んでいる資料といえる。そうした現状をふまえ、本稿では、今後の国宝再整理事業の方向性として、大きく、1）沖ノ島遺跡出土鏡そのものの考古学的方法・自然科学的方法の両者による検討の深化、2）沖ノ島各遺跡での出土状況の再検討（特にI号・F号巨岩周辺の祭祀のあり方）、3）沖ノ島遺跡出土鏡群についての、列島内の古墳出土鏡との比較（特に古墳時代前期後半～中期の古墳副葬品との比較）の３点を挙げた。

キーワード：青銅鏡、三角縁神獣鏡、倭製鏡、同型鏡群、岩上祭祀

１．はじめに

本稿は、沖ノ島遺跡出土鏡群に関する調査・研究の現状を整理し、今後の国宝再整理事業に向けた課題を提示することを目的とする。沖ノ島から出土した青銅鏡資料および関連資料は、伝出土鏡と推定出土鏡をあわせると全体で80面以上が知られている（重住他2010；水野編2010；下垣2018）。現在国宝部会として検討が行われている金属製品や石製品などと比較すると、出土資料の現状に関する整理が最も進んでいるのがこれらの鏡資料である。これは、奈良県立橿原考古学研究所により行われてきた三次元計測とそれに伴う資料観察の蓄積という点によるところが大きい（水野編前掲）。本稿では、そうした成果を前提としながら、長期的な視点で考えた場合に今後どのような調査・研究の方向性が期待されるかという点について、近年までの考古学的研究の成果を検討することを通じて考えてみたい。

２．沖ノ島出土鏡に関する調査・研究の現状と課題

(1) 沖ノ島遺跡出土鏡群の総体的把握

沖ノ島遺跡出土鏡群については、2010年に刊行された報告書『考古資料における三次元デジタルアーカイブの活用と展開』（水野敏典編、奈良県立橿原考古学研究所発行、以下「三次元報告書」）の中で、重住真貴子氏、水野敏典氏、森下章司氏らにより資料の来歴が整理された。これにより、確実に沖ノ島出土鏡と考えられるものとして計71面の資料が存在すること、またそれらが後漢鏡から古墳時代各時期の鏡、また唐式鏡まで含めて幅広い時期にわたり存在することが確認されている（重住他2010）。下垣仁志氏は、伝出土鏡・推定出土鏡なども含めると約85面としている（下垣2018）。資料の詳細については三次元報告書を参照していただくこととし、以下ではこれらの資料をめぐる研究史について概観したい。

(2)『沖ノ島』『続沖ノ島』『宗像沖ノ島』における調査・研究

第一次調査・第二次調査の報告書である『沖ノ島』（1958）および『続沖ノ島』（1961）では、16号～19号遺跡を中心とした地点からの出土鏡について報告が行われた。特に原田大六氏による17号遺跡の報告では、各資料の詳細な記述のみならず、鏡群全体の技術的特徴や年代的な評価が行われており、古墳時代の鏡研究の中でも特筆すべき成果となっている。前期後半の倭製鏡・三角

縁神獣鏡を主体とした17号遺跡出土鏡群の構成は、後年の研究においても前期後半～末の時期における基準資料の一つとなった。その後、1971年に行われた第三次調査をふまえ、21号遺跡出土鏡や、それ以外の関連資料についてもまとまった形で報告されたのが『宗像沖ノ島』(1979) である。これにより社外品や伝世品も含めた資料の存在があらためて注目されることになった。

(3) 1980 ～ 2000年代までの研究成果と三次元計測の成果

沖ノ島出土鏡群の中には、上述のように古墳時代各時期の鏡が含まれるが、大きく前期の鏡と中期以降の鏡に分けられる。古墳時代の鏡研究は、特に1990年代以降、前期の鏡を中心として分類・編年研究が進展するが、この中で沖ノ島遺跡出土鏡群も基準資料として取り上げられることが多くなった。特に仿製三角縁神獣鏡や倭製鏡の各系列の資料が多く含まれることから、前期後半から末の編年基準の一つともなっていった（例：福永1994・2005；岩本2005・2020；森下1991・2002；下垣2003など)。また宗像地域を中心とした在地の古墳築造動向と沖ノ島出土鏡群の来歴等が再検討された（花田1999)。そうした研究をふまえ、筆者は沖ノ島17号遺跡の鏡をはじめとしたⅠ号巨岩付近の奉献品に超大型の倭製鏡が含まれること、またそうした超大型鏡が北部九州の古墳副葬品としては殆どみられないことから、沖ノ島の鏡が基本的に近畿中枢から直接持ち込まれて奉献されたものである可能性が高いことを論じている（辻田2007)。

他方、中期以降の沖ノ島出土鏡については、川西宏幸氏（2004）の同型鏡群に関する研究以外ではまとまった形で検討されたものは殆どみられないが、この点については後述するように2010年代以降大きく転換することになった。

ただし、筆者の研究も含め、国宝である沖ノ島遺跡出土鏡群について、資料の直接的な観察は困難であることから、分析や検討は基本的に報告書と写真などに依拠したものであった。そのような中で刊行されたのが、上述の三次元報告書である（水野編2010、重住他2010)。これにより、沖ノ島出土資料および関連資料の全体像が明らかにされるとともに、精細なカラー写真と三次元画像が公表されたことにより、公開という意味での各個別資料の情報量が格段に向上したことは特筆される。また本報告書では、他にも菅谷文則氏、水野敏典氏、徳田誠志氏、奥山誠義氏、鈴木勉氏らにより、鏡の製作技術や鏡にみられる赤色顔料の分析など、多様な視点からの分析の結果が論考として収められている。

(4) 2010 ～ 2020年代における調査・研究の現状と課題

2010年代以降では、上記の三次元報告書や古墳時代銅鏡研究全般の進展を受けて、沖ノ島遺跡出土鏡群に関して多方面からの検討が行われている点が注目される。具体的な論点としては、福津市勝浦峯ノ畑古墳の出土資料が再整理されて報告された結果、同型鏡３面を含む８面前後の鏡が副葬されていたことが明らかになったこと（辻田2011)、それをふまえて同型鏡群が出土している沖ノ島21号遺跡との関係について検討が行われた結果、古墳時代中期後半以降、近畿の王権中枢に加えて在地の上位層が沖ノ島祭祀に関わる比重が増加したと考えられるようになったことが挙げられる（小田2012；辻田2012)。2012年に開催された九州前方後円墳研究会で『沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉』がテーマとして掲げられ、沖ノ島から出土した各種器物や各地域との関係といった観点から広く沖ノ島祭祀が検討されたが、その中 で５世紀中葉前後の画期もまた沖ノ島21号遺跡とともに注目された。このような沖ノ島21号遺跡の資料については、その後の同型鏡群の研究の進展とも連動する形で検討が行われている。これらの同型鏡群および勝浦峯ノ畑古墳出土鏡群については、後述するように、同型鏡群の副葬開始年代とも関わる形でその後検討が行われている（辻田2018；加藤2020；岩本2021)。また前期倭製鏡以来の沖ノ島遺跡出土鏡群の内容全般についても

再検討が行われ、全国的な視点からの位置づけがこれまで以上に積極的に行われるようになった点も特筆される（下垣 2018；岩本 2023；奈良県立橿原考古学研究所附属博物館編 2023）。論者によって近畿の王権中枢の関与や在地上位層の関わり方の比重について評価が異なる部分はあるものの、古墳時代前期から中期において、王権中枢との関係の中で沖ノ島の鏡が奉献されたことについては共通理解として認められるところであり、沖ノ島遺跡出土鏡群が特に 4・5 世紀代の沖ノ島祭祀において果たした役割と意義については広く学界の中でも認識として共有されているといえよう。

３．国宝調査成果についての報告

(1) X 線透過撮影による成果と実物の観察

以上のような研究動向の現状認識をふまえ、筆者も含めた国宝部会では、今後の沖ノ島遺跡出土資料の調査・研究に向けた検討を行うことになった。筆者自身は、2024 年 10 月 11 日、10 月 25 日、11 月１日の３日間にわたり、資料を観察させていただく機会を得た。あわせて、以下に記すような X 線画像との対比による資料の現状把握を行った。沖ノ島遺跡出土の鏡を含めた金属器は、令和６年度 Innovative MUSEUM 事業により、元興寺文化財研究所の協力の下、2024 年８月に X 線による透過撮影が行われた。この結果、肉眼観察では見えない亀裂の存在や、鈕内部の空間などについて、従来知られていなかった点が明らかとなった。後者については、例えばいくつかの資料について、一見すると鈕孔が塞がっていて貫通していないように思われる資料でも、X 線画像では鈕孔が貫通している状況が観察できる場合などがあり（図 1: 資料番号 16-1〔仿製三角縁神獣鏡〕）、撮影画像の有効性が示されている。さらに今後、亀裂の観察などを通じて、将来的な保存・管理に向けた検討を行っていく必要がある。

(2) 沖ノ島各遺跡出土鏡の組合せについての所見

筆者は今回の調査機会の中で、観察可能な鏡資料についての実物観察と写真撮影を行った。今後、出土状況や出土地点相互の関係などの検討を行う必要があるが、こうした個別資料のまとまった形での観察の結果、沖ノ島遺跡出土鏡の構成の特徴があらためて浮き彫りになった。具体的には、１）三角縁神獣鏡の中での、いわゆる「舶載」三角縁神獣鏡の少なさと「仿製」三角縁神獣鏡の多さ、中でも後者の最新型式資料の多さ、２）前期倭製鏡の多様性と、前期後半の型式の多さ、３）中期後半の同型鏡群と倭製鏡の型式の偏在性などである。

１）は、沖ノ島からは特に仿製三角縁神獣鏡の最新型式が多く出土していることから、三角縁神獣鏡全体の終焉を考える上でも重要である（岩本 2005）。沖ノ島出土鏡全体でみた場合も、舶載三角縁神獣鏡の出土面数の少なさに対し、仿製三角縁神獣鏡の比率が高いことは、沖ノ島における鏡の奉献の開始年代を考える上での指標となる可能性を示している。

２）は、17 号遺跡をはじめとして前期倭製鏡の資料が多数出土する中、前期前半の資料が殆ど含まれておらず、前期後半から末の資料が大半である点によるものである。仿製三角縁神獣鏡の最新型式が多いこととあわせて、どのような鏡がどのように持ち込まれたかという点があらためて注目される。また前期倭製鏡に特徴的な面径の大小という点においても、中・小型鏡が多い一方で、大型鏡（19cm 以上）や超大型鏡（25cm 以上）が複数出土している点もあらためて注目される。上述のように北部九州の前期古墳では倭製鏡の超大型鏡の出土が知られておらず（辻田 2007）、沖ノ島における超大型鏡の出土は近畿中枢との直接のつながりを考える上で重要な論点である。この点も含め、あらためてどのような系列・型式のものが含まれているのかについての検討が必要である。

３）は、古墳時代中期における同型鏡群の出現年代を考える上で現在も論点となっている問題である。また沖ノ島 21 号遺跡出土鏡群と福津市勝浦峯ノ畑古墳のような在地の最上位墓の副葬鏡との共通性という点から、在地上位層が沖ノ島祭祀に主体的に関わるようになる過程を考える

図１　沖ノ島 16 号遺跡出土仿製三角縁神獣鏡

上でも、同型鏡群及び倭製鏡の種類の検討が不可欠である。同型鏡群の副葬開始年代については、ON46-TK208 型式とみる説（川西 2004；上野編 2013；辻田 2018）と TK208-TK23 型式以降とみる説（加藤 2020;岩本 2021・2023）の両者があり、その意味でも沖ノ島 21 号遺跡出土鏡群の評価は古墳時代中期の時代像に深く関わる問題として喫緊の課題といえる。沖ノ島から出土した中・後期の倭製鏡についても現状ではいわゆる鈴鏡が含まれていない点も含め、同時期の古墳副葬鏡との比較が必要である。

これらはいずれも従来から認識されている点ではあるが、出土状況の再検討も含め、これらの鏡群がどのようにして沖ノ島にもたらされたのか、またその意義はどのように説明されるのか、といった点については未解明な部分も多く、今後に残された課題が多いといえよう。

４．国宝再整理事業に向けて

以上の現状をふまえ、ここでは以下の３つの点について、今後の調査・研究の方向性として提起したい。

１）沖ノ島遺跡出土鏡そのものの研究の深化。現在の研究動向をふまえた各資料の評価と今回の X 線調査の成果をふまえた自然科学的な方法に基づく検討も含む。

２）沖ノ島各遺跡での出土状況の再検討。特に I 号巨岩周辺と F 号巨岩における祭祀のあり方について、他の副葬品との関係も含めた検討を行う。

３）沖ノ島遺跡出土鏡群について、列島内の古墳出土鏡との比較を行う。特に古墳時代前期後半～中期における古墳副葬品との比較により、沖ノ島遺跡出土鏡群の位置づけについて再検討を行う。

１）については、近年検討が進んでいる、各時期の倭製鏡の分類・編年および同型鏡群に関する研究成果などをふまえた各資料の位置づけの評価に関わるものである。また今回 X 線による撮影が行われた結果、肉眼観察では安定した状態に見えるものでも、内部では亀裂が走っている資料などが多く見受けられた。今後長期にわたり資料を安定した形で保存・管理していくためにも、何らかの保存処理が必要かどうかといった点も含めた個別資料の検討が必要と考える。

２）については、I 号巨岩周辺の 16 号～ 19 号遺跡と、F 号巨岩上の 21 号遺跡それぞれについての出土状況の再検討である。前者については、21 面の鏡がまとまった形で出土した 17 号遺跡以外では、本来の奉献の位置から動いているものと想定され、相互の関係などについても不明な点が多い。他の器物の年代観や、それらとの共伴関係についても再検討が必要である。21 号遺跡については、報告書に示された石材の位置関係が修正され（小田 2012)、またフォトグラメトリによる復元の成果なども公表されている（岡寺 2021)。21 号遺跡は、同型鏡群や鉄器類などをはじめ、元来奉献された器物は非常に多量で種類も多岐にわたっていたものと想定される。一定の時期幅が存在する可能性も含め、鏡に限定されない形での出土資料の見直しと再評価が必要になるものと考える。

３）については、調査報告書の刊行以降の約半世紀の間に進展した鏡研究及び古墳編年研究等の成果をふまえ、各時期の代表的古墳における鏡の共伴関係との比較という点が課題として挙げられる。具体的には、大きく①古墳時代前期後半～末前後、②古墳時代中期中葉～後葉の二つの時期が論点となる。

前者は、前期倭製鏡の後半期および仿製三角縁神獣鏡の副葬終了時期であり、特に仿製三角縁神獣鏡の最新型式のものが集中する沖ノ島 16 号～ 18 号遺跡（と 19 号遺跡）は、前期における鏡副葬がどのように終焉したかという問題を考える上で重要である。その意味では、例えば奈良県佐味田宝塚古墳や岡山県鶴山丸山古墳をはじめとした、前期後半～末前後の各地の基準資料との比較が必要であり、具体的な検討課題としておきたい。

後者は、主に沖ノ島 21 号遺跡の資料の評価に

関わるが、特に同型鏡群の出現時期や中・後期倭製鏡の年代観を考える上で、北部九州のみならず列島各地の古墳の副葬品の共伴関係との比較が必要となる。また鏡以外の器物でどのような種類のものが供献されていたかという点は、5世紀中葉以降の沖ノ島祭祀の展開を考える上でも重要であり、この点を課題としておきたい。

上記の１）～３）はいずれも相互に密接に関連しているものであるが、大きくはＩ号巨岩付近の16～19号遺跡における沖ノ島祭祀の始まりの問題と、Ｆ号巨岩上の21号遺跡における５世紀中葉以降の沖ノ島祭祀の「場」の「変化」という二点に収斂する。あわせて、それ以降の遺跡や時代に属する鏡についても、沖ノ島祭祀において鏡以外の器物の奉献が主体となった時期にどのような鏡がどのように用いられたかという点で重要であり、これらについても同様の検討が必要である。その意味でも沖ノ島の鏡は古墳時代から古代への鏡の変遷を示していることがあらためて認識されるところである。

５．結語

以上、令和６年度における国宝部会事業の一環として、鏡資料について観察させていただいた結果を報告した。特にＸ線による透過撮影などの新たな調査成果をふまえた資料の再検討が期待されるところである。上述のように、沖ノ島の鏡は、沖ノ島祭祀全体の変遷では比較的初期に属するものであり、その総体が把握されている点では、岩上祭祀や岩陰祭祀において他の器物を用いた祭祀とどのような関係にあったのか、という点を考える上でも時間的な指標の一つとなるものである。その意味でも鏡資料の検討は沖ノ島祭祀の始まりとその実態を考える上で不可欠であり、国宝部会の中で今後さらに研究が深化することを期待したい。

参考文献

岩本崇　2005 「三角縁神獣鏡の終焉」『考古学研究』51-4

岩本崇　2020 『三角縁神獣鏡と古墳時代の社会』六一書房

岩本崇　2021 「福岡県勝浦峯ノ畑古墳出土鏡群の再検討」『島根大学法文学部紀要 社会文化論集』17

岩本崇　2023 「鏡からみた沖ノ島祭祀の展開」『沖ノ島研究』9

上野祥史編　2013 『祇園大塚山古墳と５世紀という時代』六一書房

梅原末治　1940 「筑前宗像神社所蔵の古鏡に就いて」『考古学』11-3

梅原末治　1966 「福岡県下出土の夔鳳鏡片」『九州考古学』28

小田富士雄　2012 「沖ノ島祭祀遺跡の再検討2」『「宗像・沖ノ島と関連遺産群」研究報告』2

岡寺未幾　2021 「沖ノ島21号遺跡についての再検討（予察）―記録写真の分析から―」『沖ノ島研究』7

加藤一郎　2020 『古墳時代後期倭鏡考』六一書房

川西宏幸　2004 『同型鏡とワカタケル』同成社

九州前方後円墳研究会編　2012 『沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉』九州前方後円墳研究会

重住真貴子・水野敏典・森下章司　2010 「沖ノ島出土鏡の再検討」『考古資料における三次元デジタルアーカイブの活用と展開』奈良県立橿原考古学研究所

下垣仁志　2003 「古墳時代前期倭製鏡の編年」『古文化談叢』49（下）

下垣仁志　2010 『三角縁神獣鏡研究事典』吉川弘文館

下垣仁志　2011 『古墳時代の王権構造』吉川弘文館

下垣仁志　2018 「沖ノ島の鏡」春成秀爾編『季刊考古学別冊27 世界の中の沖ノ島』雄山閣

辻田淳一郎　2007 『鏡と初期ヤマト政権』すいれん舎

辻田淳一郎　2011 「Ⅳ 主体部出土遺物 １．鏡」『津屋崎古墳群Ⅱ 勝浦峯ノ畑古墳』福津市文化財調査報告書第４集

辻田淳一郎　2012 「九州出土の中国鏡と対外交渉―同型鏡群を中心に―」『沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉』九州前方後円墳研究会

辻田淳一郎　2018 『同型鏡と倭の五王の時代』同成社

辻田淳一郎　2019 『鏡の古代史』角川選書

奈良県立橿原考古学研究所附属博物館編　2023 『神宿る島 宗像・沖ノ島と大和』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館

花田勝広　1999 「沖ノ島祭祀と在地首長の動向」『古代学研究』148

原田大六　1961 「十七号遺跡の遺物」『続沖ノ島』宗像神社復興期成会

春成秀爾編　2018 『季刊考古学別冊27 世界の中の沖ノ島』雄

山閣
福永伸哉　1994 「仿製三角縁神獣鏡の編年と製作背景」『考古学研究』41-1
福永伸哉　2005 『三角縁神獣鏡の研究』大阪大学出版会
柳田康雄　2011 「沖ノ島出土銅矛と青銅器祭祀」『「宗像・沖ノ島と関連遺産群」研究報告』1
水野敏典編　2010 『考古資料における三次元デジタルアーカイブの活用と展開』奈良県立橿原考古学研究所
宗像神社復興期成会　1958 『沖ノ島』宗像神社復興期成会
宗像神社復興期成会　1961 『続沖ノ島』宗像神社復興期成会
宗像大社復興期成会　1979 『宗像沖ノ島』宗像大社復興期成会
森下章司　1991 「古墳時代仿製鏡の変遷と特質」『史林』74-6
森下章司　2002 「古墳時代倭鏡」車崎正彦編『考古資料大観 5 弥生・古墳時代 鏡』小学館